

反復可能性と計算責任——デリダの擬似存在論

伊藤潤一郎（早稲田大学）

反復可能性は、エクリチュール、痕跡、差延などとともに、ジャック・デリダの思索の歩みに通底する主要なモチーフの一つとして挙げられるだろう。『声と現象』では、フッサール現象学のイデア性を脱構築する最大のポイントが反復可能性であり、サールと言語行為論についての論争を巻き起こした「署名 出来事 コンテキスト」（『哲学の余白』所収）では、最も純粋な一回限りの行為と思われる署名が、連署という反復可能性において脱構築されることとなった。

反復可能性の問題はこのように様々な場面で登場する分、デリダが用いる多様な操作子と絡み合い明確に論じることが難しい問題だともいえる。そこで本発表では『プシュケーII』所収の「ウィの数」に焦点を当てて反復可能性を論じることとする。1987年に発表された「ウィの数」は、ミシェル・ド・セルトーやフランツ・ローゼンツヴァイク、ハイデガーらのテキストを駆使して、あらゆる言表に含まれ、あらゆる言語作用を条件づけているウィの次元を浮き彫りにするテキストであり、同じくウィの問題を論じた『ユリシーズ グラモフォン』とともにデリダの言語論の頂点とも言われる。そこでデリダは、自らが語るウィを、ハイデガーが「言語の本質」（『言葉への途上』所収）で記述した *Zusage* と通い合わせつつも、その純粋主義的な傾向に対して、ウィがウィ、ウィという反復においてしかありえないという、ほかならぬ反復可能性の点から脱構築を仕掛けている。そして「ウィの数」における反復可能性には、二つの特徴的な点がある。一つには、ウィの反復可能性の問題系が、計算責任という責任の問題系へと接続されていくことである。ここからはデリダの前期の仕事においてとりわけ顕著な反復可能性の問題系に、後期デリダが強調する責任や約束の問題系がすでに孕まれており、1980年代の時代状況とともに力点が移っていったのだということがうかがえるだろう。そしてこのような反復可能性の倫理的問題は、デリダが反復可能性に見出す開放性と密接に結びついている。第二の点は、ハイデガー存在論を脱構築するデリダ自身の議論が「擬似存在論的 *quasi ontologique*」と形容され、反復可能性を介して、ハイデガー存在論に対するデリダの立場が示唆されていることである。同時期の「隠喩の退隠」（『プシュケーI』所収）でもハイデガーを脱構築する重要な戦略素となっている「擬似 *quasi*」の問題は、反復可能性がもつ「根源的」虚構性という側面を示し、ハイデガーとデリダの関係を考える上で最も重要なポイントの一つとなる。

以上をふまえ本発表では、「ウィの数」の読解によって、反復可能性がすでにして責任の問題であり倫理の問題であるということを跡付けつつ、それがデリダの語る「擬似存在論的」という措辞といかに関係しているのかを明らかにすることを目指す。それはまたデリダの脱構築とハイデガー存在論の関係の一端を明らかにすることでもあるだろう。